

# 小崎弘道の宗教思想

原島正

## はじめに

小崎弘道（一八五六—一九三八）は日本プロテスタント史における最初の弁証家であった。<sup>(1)</sup> 弁証家（Apologist）とは元来「古代教会時代キリスト教攻撃に対して弁証の証を著した教父達」を言う。

キリスト教は今日のパレスチナ地方にユダヤ教を母胎として生まれ、ヘレニズム世界へと伝播されることによつて、ユダヤの一民族宗教から世界宗教へと成長していくのであるが、その過程でキリスト教の真理たることを、一方ではギリシャ哲学との関連で明らかにし、他方ではユダヤ教とくに旧約とイエス・キリストとの関連を明らかにし、ギリシャ人にも、ユダヤ人にも彼等が求めていた真理が

キリスト教に完全に見い出されることを示す必要があった。さらにローマ皇帝による迫害に直面するようになると、その迫害の不当なることをときの権力者に訴えることになる。

このように、紀元一世紀から二世紀にかけて活躍し、キリスト教信仰を時代風潮に対してその真理たる所以を弁証することで、キリスト教とは何かを明らかにしたのが、弁証家と呼ばれる人々であ

る。代表的な人として、ユスティノス（Justinos 100—165）とテルトゥリアヌス（Tertullianus 150／60—165）をあげることができる。

小崎を始めとする日本の初代プロテスタント基督者も第一に既存の伝統思想（儒教あるいは武士道）、第二にキリスト教とほぼ同時に日本に紹介されたヨーロッパの哲学思想（スペンサーの不可知論）や科学思想（進化論）との関連で自己の信ずる基督教の真理たることを明確にし、あわせて新日本の形成に基督教が寄与する所以を説いた。

## 一、基督教の弁証の三段階

それでは、小崎弘道は基督教をどのような仕方で弁証したのであらうか。

小崎は基督教を次の三つの段階（三つの側面でもある）で弁証する。その第一段階は宗教一般的の弁証である。小崎における「啓蒙主義」の受容は宗教の否定ではなく、逆に宗教の意義の解明を意味する。すなわち、小崎にとっての「啓蒙」は「未開人・文明人を問わ

ず、人は宗教なくして生きることはできない」ことを明らかにし、宗教への偏見を除去することであった。<sup>(5)</sup> 小崎は「夫れ人類は宗教の生物なり。宗教なくしては一日も生息可きものにあらず」と述べ、さらに国家にとって宗教が不可欠であることを説く。「一国の成立に欠くべからざるものは政と教の二つである。古来政教の関係を以て車の両輪、鳥の両翼に比したが、余は之れを以て一家に於ける夫婦の関係に比したい。」<sup>(6)</sup>

小崎の基督教弁証の第二段階は基督教が真正の宗教である所以を明らかにすることである。小崎は、文明の精神として、文明を推進する宗教である基督教を、換言すれば、智の進歩に即応した宗教としての基督教を取り入れることを主張する。<sup>(7)</sup>

小崎はさらに第三段階として、「信」の意義をあきらかにする。すなわち、小崎によれば「信」こそが人をして人たらしめるもので、宗教を語るに「信」なくしては語ることはできない。「夫れ宗教の入所は信なり、誠実の心なり、苟くも信なく誠実の心なくんば到底宗教の事は知るべからず」<sup>(8)</sup>。小崎にとって宗教とは「智情意の三つを含みたる人格即ち其生命」に關わることであり、「信」とは智情意即ち全靈魂の動作である。したがつて、「夫れ信は宗教の精神なり。宗教にして信に基かずんば人に精神なきと一般、豈に之を宗教と称するを得んや」ということになる。さらに、信の対象は、「見る可らざる事」である。この「信」こそが根本の生命であり、歴史形成の力を持つ。

小崎は明治十六年十一月ルウテル記念会で「真正なる宗教の必要」という題で演説をしている。その演説で小崎は次のように述べ

る。「今や政治法律教育芸術等外部の開化には尚ほ為すべき事多しと雖も既に改進の途に向ひたりと謂はざる可からず。然れども内部の開化未だ端緒に就かざるなり。旧を棄てたるもの未だ新に就かざるなり。港を出でたるもの達すべき地あるを知らざるなり」<sup>(9)</sup>。ここで外部の開化と内部の開化が対比されていることに注目したい。小崎によれば現代は過渡期である。旧きものは日増しに失われていくが、新しいものは今だ与えられていない過渡期である。そして過渡期としての現代は不安定で人々の心は空虚である。その空虚を何で充足したらよいのか。小崎は述べる。「今夫れ我国の有様は身体手足ありて頭首具はらざるが如く人心にも良心なきが如きなり。嗚呼、此の欠乏は何を以つて補ふを得可きか世人は何を以つて此の空虚を填さんとするか且つ社会は活物なり。人生の活動姑らくも止む可らず。人智は益々開発せんとす。人智益々開發せば人心彌々嶮岨なるならん。世人は何を以つて此の嶮岨なる人心を矯正せんとするか」<sup>(10)</sup>。儒教はどうか。儒教は封建時代に起つたもので、「其の精神は徹頭徹尾古を尚び今を賤しめ君を尊び民を輕ろんずるに在れば今日改進の世界に行はる可きものにあらず」<sup>(11)</sup>。それ故に、「余は茲に断じて云はんとす。我國宗教大運動の時機已に熟し其人心を満足捨取す得可き宗教なく大空虚を生ずるに当り此の大空虚を充たし其人心を満足捨取し得可きものは唯真正なる宗教たる基督教あるのみ」ということになる。

### 北村透谷の場合

北村透谷（一八六八—一八九四）は『内部生命論』（一八九三）

でキリスト派の先輩の事業として「生命の木なるものを人間の心に植え付けたる」にあるとする。すなわち、外部の文明に対して内部の文明に貢献したのである。北村は東西二大文明要素を「生命を教ふるの宗教」として理解する。そして基督教はまさしく「生命を教ふるの宗教」である。北村は内部生命 (inner life) を強調するのであるが、内部生命とは、内部の経験、内部の自覚と言つてもよしとする。「要するに根本的生命を指して言ふに外ならざるなり」。北村によれば、明治の思想にたいする基督教の貢献はこの内部の経験、内部の自覚をもたらすことである。他方、儒教道徳にたいしては、実際的道徳にして人間の生命を教えつくしたものとは言えない、と批判する。<sup>[16]</sup>

内村鑑三の場合

にたいする基督教の貢献はこの内部の経験、内部の自覚をもたらすことである。他方、基督教道德にたいしては、実際的道德として人間の生命を教えてくれたものとは言えない、と批判する。

二　國家の元氣としての宗教

「内に深き生命を湛えざる今の日本人は外の生命を除いて他に之に対抗するに足る内の生命を持たないのである」（同書）。内村によれば「キリストの福音に接して人は初めて内的生命の何たる平を知る」『宗教とは何ぞや』（一九二〇<sup>20</sup>）。

以上小崎弘道、北村透谷、内村鑑三、とその宗教観の一端を紹介したが、三者に共通することは宗教を「内なる生命」、「内部を充足する生命」としてとらえていることである。

内村は『道徳と宗教』（一九〇五）で「道徳は外を謹しむにあり、…内部の欠乏を外部の修飾をもつてする」とし、「宗教は内を充たす、…内部の充実を以て外部に光沢を加える」とする。<sup>17</sup>つまり道徳は外から内へ、宗教は内から外へと方向を逆にする。とりわけ、「基督教は内九分にして外一分なり」『内と外』（一九一六）<sup>18</sup>。さらに内村は宗教を内的生命とする。「宗教は人の内的生命である。…人の内的生命たる宗教に対し云へば宗教以外の事はすべて之を外的生呑と称ふことが出来る」『宗教と其の必要』（一九一五）<sup>19</sup>。内村はこのように宗教をとらえ、次のような日本人批判をする。

ところで「国家の元氣論」は明治期の前半にしばしば取り上げられたテーマであった。

例えば、林竹太郎は『六合雑誌』七九号（一八八七）に「國家の元氣」という論文を発表している。徳富蘇峰は「國民の元氣と教化の標準」を書き『國民之友』一八七号に掲載している。おそらくこの蘇峰の文章に刺激されてと思われるが、北村透谷は「國民思想」のながで次のように論じてゐる。

「國民の元氣は一朝一夕に於て転移すべきものにあらず。其の源泉は隠れて深山幽谷の中に有り、之を索むれば更に深く地層の下にあり、底の如き山の之を穿つ可からず、安くんぞ國民の元氣を捜取して之を転移することを得んや。思想あり、思想の思想あり、而して又た思想の思想を支配しつべきものあり、一國民は必らず國民を成すべき丈の精神を有すべきなり」。<sup>(25)</sup>

### 三、道徳宗教の必要

小崎によれば国家は政治のみを以て立つことは出来ない。道徳宗教が国家には不可欠である。

小崎は「修身学の道徳」と「宗教の道徳」を次のように区別す  
る。<sup>(26)</sup>

- (一) 修身学の道徳では義を行つて義人となる。
- (二) 修身学の「道」は外にある。

- (一) 宗教の「道」は内にある。
- (二) 修身学の道徳での修業は、その目的に達することに終始勉め

る。したがつて、そこには進歩がある。宗教の道徳では、すでにその目的に達している。その目的と一体になつてゐる。したがつて、そこにはそれに励まされてなす發育がある。

このように両者を区別する。けれども修身学の道徳は前段階であり、連続している。小崎によれば道徳は宗教と結びつくことで内面化される。道徳に内的推進力を付与すると言つてよい。

小崎はしばしば道徳に必要なもの、それは權威と感化力であり、宗教によつて、それらは与えられることを主張する。

「世俗道徳（宗教的道徳に対して云ふ）の欠点は略懶教の欠点と同じく感化力の乏しきと權威の足らざることはなり。……道徳の实行に最も必要なものは感化力と權威の二つなり。道徳に感化力なければ唯一個の空論たるに過ぎず、亦社会人心に何の効力をか及すを得ん。……道徳に權威なければ宛も法律を実行するの政府なきと一般、唯一個の徒法たるに外ならず」。<sup>(27)</sup> と述べ、宗教の道徳が必要であるとする。

こうした宗教に基づいた道徳（道徳宗教）が国家には不可欠である。それでは、道徳宗教は国家に如何なる影響を及ぼすのであるか。『政教新論』（一八八六）では次の三つを挙げている。<sup>(28)</sup>

- (一) 道徳宗教は、國家の元氣なり、生命なり。道徳頽敗して國家完全なるもの未だ之れ有らざるなり。宗教衰頽して國力振起せるもの未だ會て聞ざる所なり。
- (二) 道徳宗教は、國家を鞏固にし、政体を堅牢にするの基礎なり。
- (三) 道徳宗教は、國家を鞏固にし、政体を堅牢にするの基礎なり。

『基督教と国家』（一八八九）では基督教が国家に対し及ぼす影響として、次の二つを挙げている。<sup>(29)</sup>

(一) 宗教道德は国家の元氣なり、又生命なり、如何なる邦国にても宗教の盛んなる時は、其國元氣の興起し又其生命の盛んなる時にて、宗教と国家は常に其興敗を與にするものと云ふべし。……宗教道德なきの国民は良心なきの国民なり、良心なきの国民争で安全幸福を全ふするを得ん、而して一国の良心となり元氣となり生命となる可き教は基督教を捨て他に何をか求めん、是れ古來基督教國を除くの外眞に国民の体裁を成すものあらざる所以なり。

(二) 基督教能く社会の不平心を医し、能く人心の安寧を保持す國に破壊主義の政党起り、社会に粉乱を好む者は主として人心の不平あるに因らずばあらず、只（この）人心の不平を医するの力あるものは基督教の一力なりとす、……基督教の感化廣く一国に及ぶ時は必ず其社会に不平を懷く者なく、国家安全を保つに至らんこと疑ふ可からず。

#### 四、二つの宗教觀

以上のことから、小崎の宗教觀には次の二つがあると言える。そのひとつは「國家の元氣としての宗教」である。すなわち國家を内から形成していく力としての宗教である。もうひとつは「國家安寧の基盤としての宗教」である。すなわち国民教化の手段としての宗教である。小崎の場合両者はひとつであった。けれども、明治二十年以前の明治國家形成期には前者「國家の元氣としての宗教」が、明治二十年以降の國家確立期には後者「國家安寧の基盤としての宗

教」が強調されている。すなわち明治二三年の『基督教と国家』は兩者がならんではいるものの、この論文は「基督教は破壊的なり、その教旨は父を無し君を無するの教なりとの悪評」に答えたものであり、後者に重点が置かれている。小崎によれば「基督教は従順の教えなり、然れども黙従の教えに非ず、又政教の分を為し、教を奉ずるが故を以て国家に対する義務を怠り、國家に奉するの故を以て神に対する義務を怠る者に非ず、而して國体の如何、政治の如何は其教の問ふ所に非ず、君主專擅國にまれ、君民同治國にまれ、共和政治國にまれ、至る所行は得るものにて、嘗て其政体、其國体と衝突したる事あるを聞かざるなり」。<sup>(30)</sup>さらに基督教には「其國家を鞏固にし、其社会の秩序を保持するの力」がある。そのことは「古今歐米の歴史に照らして疑ふ可からざるの事実なり」と小崎は言う。その場合小崎は政教一致を理想としたのではない。むしろ「政教別途の教旨」を主張する。小崎にとってのお手本はアメリカである。「彼の米國の如きは所謂宗教の自由の國なり、然れども基督教を以て國家の基本と為すに於ては更に他の基督教國と異なる事となし」と小崎は述べる。<sup>(31)</sup>

このことの背景には明治期基督教の發展の状況がある。日本のプロテスタント基督教は明治二十年以前は△満開の時代△であり、きわめて順調であった。『政教新論』はその時期に書かれた。けれども二十年以降は△反動の時代△となり、試練に直面したのである。<sup>(32)</sup>この時期の基督教にたいする批判ないしは排撃に答える目的で書かれたのが『基督教と国家』である。そして三十年以降は二十世紀大挙伝道によつて教勢は盛りかえしたのであるが、かつてのエネルギー

一はもはや見られず、政府の宗教政策への期待が前面にてでくる。それが『国家と宗教』（一九二三）である。本書は明治四五年の「三教者会合同」への積極的評価が中心となつてゐる。

小崎は三教者会合同の意義を次のように記す。<sup>(34)</sup>

「従来の制度にては我国は宗教なるものを全然無視して居たのに、爰に始めて其の必要を認め國家に対して宗教なるものが少くべからざるものなることを認めたことである。我當局者自身に於て果して宗教に対し適當の尊敬を払つて居るか否かは疑問であるが、宗教なるものが國家の組織に少くべからざるものであることを認め、風教道徳を維持するに宗教は教育と相俟て少くべからざるの要素であることを認めるに至つた事は我国近時の大いなる進歩となさねばならぬ。」

### 五、明治青年の第二世代

しかしながら、少なくとも、明治二十年頃までの小崎の関心は新日本建設のための内的推進力である△國家の元氣△にあつた。その元氣は宗教にもとづいた道徳によつて振作されるのであるが、その宗教は文明の時代にふさわしいものでなければならない。すなわち基督教こそが儒教に変わって国民の精神の基盤とならなければいけない、というのが小崎の確信であり、彼の牧師としての活動を支えるものであつた。

それでは次にこうした小崎の使命觀とその背後にある宗教觀を導きだした要因について考えてみよう。

小崎たち日本のプロテスタント基督教初代の人達は明治維新にわ

ずかにおくれた世代である。たとえば小崎は維新を十二歳で、内村は八歳で迎えた。<sup>(35)</sup> 維新を過去のこととしてしまうわけにはいかない。自分達なりに維新を遂行するという意欲に燃えている。しかしながら、すでに新日本の枠組みはすでに形成されつつある。わずかにおくれた世代としては、その枠組みの内側に眼を向け、いまだ未開拓の領域で維新をなしとげたいと志す。それが、内部の開化であり、自分達の使命はそこにありと受けとめたのである。つまり小崎によれば明治初年の維新はたかだか政治それも制度の面においてなされたに過ぎず、精神においてはいまだ旧來のものを踏襲している。近代日本の改革は決して終わっていない。まさしく今日が改革の時代であり、自分達はそれに従事するのだ、ということになる。<sup>(36)</sup> 色川大吉氏は明治の青年の第一世代と第二世代を區別する。第一世代は一八五〇年前後に生まれた人々で「この人びとはいづれも文化活動家」というよりは『政治家兼何々』とよんだ方がふさわしいタイプである。それに対して、第二世代は一八五〇年代の後半から六〇年代、七〇年代に生まれた人々で明治文化の創始者となる。彼等には幕臣が多い。明治維新に取り残された人々で「来たるんとする時代」に期待をかけた世代である。それ故彼等には「第一世代の樂天的な政治主義をいつたん疑つたところからスタートした屈折した精神の陰翳の持主が多い」のである。<sup>(37)</sup>

小崎は最初は政治家になろうとした。けれども宗教へと関心が移行する。宗教を通して國家に貢献しようとしたのである。それ故に今中寛司先生の御指摘のように為政者的立場から宗教を考えていたことになる。<sup>(38)</sup> その場合宗教を国民教化の手段としてではなく、自ら

の「信」によって生きることで、宗教の国家に持つ意味を明らかにしたのである。そこが第一世代との違いである。

### 高倉徳太郎の場合

それでは、次の世代（第三世代？）ではどう変化するのであらうか。

たとえば高倉徳太郎（一八八五—一九三五）は自我の問題から出発する。そして国家と宗教ではなく文化と基督教の関係が関心事となる。例えば『キリスト教と文明の精神』（一九二五）で文明と文化を区別する。つまり文明は「理性の自然征服により、科学によつて機械によつてうち建てられる物質の王国」である。それに対しても文化は「人生の合理化、道徳化、宗教化によつてうち建てられる靈の王国」である。そして高倉はこの文化の形成原理としての基督教を主張する。高倉によれば文明改造は、生物学的方面（個人もしくは国民の保健衛生）、経済学的方面（労働運動その他の社会問題）そして靈的方面の三つによつてなされる。その際、最後の靈的方面の改造が深く顧みられなければ、眞の文明改造あり得ない。「低い文明はあり得ても眞の文化は前者だけでは生まれて来ない」と高倉は考えるのである。言うまでもなくこの眞の文化は基督教によつて与えられる。ここに、国家との関連で宗教を考えた小崎弘道を始めとする明治の宗教者と、文化の問題として宗教を探えた大正以後の宗教者との違いを見ることができる。

最後に小崎の時代認識の特色を述べ、彼の宗教思想の結論としよう。  
六、小崎弘道の時代認識

小崎は「最も良き意味に於て、常に國家の線に沿ふて伝道の歩みを進め」た牧師であった、と言われる。<sup>40</sup>それが最も良き意味かどうかは別として、小崎の基督教の弁証が国の德育政策・宗教政策に沿つてなされたことは事実である。小崎はその時代の要請に真に答えるものとして基督教を提示しようとした。そしてそこには次のように小崎なりの時代認識があつた。「私共は其時代々々に依つて神様の御示しになる所に依つて信仰を立て、其信仰に依つて動いて行くと云ふ、そこに宗教的確信の本がある」<sup>41</sup>。それ故に、小崎は時代思潮の動きに常に敏感になる。そして、小崎の見るところによれば、時代の動向は動と反動が交互に現れる。「若し動及び反動は常に相反し相等しとの物理学上の原則が人間社会の現象をも全く支配すると為さば、我が國明治年間の歴史は最も善く此の原理を顯はすものと云ふべし」<sup>42</sup>。小崎によれば、この動と反動が交互していく、時代の変遷は、必ず真理が広く国民に認められていく過程である。そうして、基督教は「其の行はるゝ所に從來より存する美風良俗を悉く集め來りて、之を純金なる基督教の教へに化せしむる」のである。換言すれば、基督教は「其の一己人たると一國民たるとを問わず、其の性質の特別なる所その優れたる所は、更に毀損することなきのみならず、愈々之を発達完全ならしむる」働きをする。

時代は基督教に新たな展開をもたらすと同時に、時代は基督教

によって、正しき方向へと純化・発展する。このことが、小崎の牧師として、生涯その使命達成のために尽力することを可能とした、信仰の確信であった。

### 註

(1) 小崎弘道は熊本出身で、洋学校教師 Leroy Lansing Janes の導きで基督者になる。『奉教趣意書』には署名していない。洋学校閉鎖後は同志社で神学を学ぶ。卒業後は東京で新肴町教会の牧師となる。青年会(YMCA)を設立し初代の会長に就任する。機関誌『六合雑誌』の編集と執筆に尽力する。明治二十三年新島襄なきあと同志社の社長及び校長として、京都に赴く。宣教師と教育方針をめぐって衝突し明治三十年に辞任。再び上京し、靈南坂教会の牧師となり、生涯を伝道に捧げる。「内村、植村とならぶ明治基督者の重鎮」といわれている。『小崎全集』全六巻がある。(小崎全集刊行会一九三八—一九三九)。

(2) 『基督教大事典』(教文館) 九七八頁—一九七九頁。

(3) 「キリスト教の源流」『石原謙著作集』第八卷(岩波書店) 七一页以下を参照。「『アポロゲーテン』(石原博士は護教家と呼ぶ)という呼称は、異教主義との思想戦においてキリスト教の側に加わってその立場を擁護した著作家の教会史用語であつて、彼等の個人的ないし学派的見解を示す神学的概念ではない。」七七頁。

(4) 「不思議なことに、我国に於ては當時(明治十二三年の

(5) 「私供明治初代に基督教を信ぜし者は、我国に之を植え附くるの六ヶ敷い仕事を与えられると同時に、思想上、此六ヶ敷い時を通うらせられたのであります。一面に於ては我が国人に対し外来の信仰を弁明するの任に当り、他の一面に於ては唯物論、進化説、自然主義等に対して福音の真理を維持するの地位に置かれました。そして是等の事に於て小崎君は我等の先達でありました。」「信仰復興のきめし」『聖書之研究』三五五号、(昭和五年一月)。

(6) こうした主張は小崎が『七一雑報』に投書したごく初期の論文に述べられている。その詳しい紹介はここでは出来ないが、論文名と号数と発行年月日を記しておこう。

「未來の説」一一二、明治十年三月二三日。

「河津先生演説ヲ読ム」四一十三、同年十一月二一日。

「宗教總論」四一三八、三九、明治十二年九月一九日、二六日。

小崎は明治十四年三月、ジユリオス・エイチ・シーリー「途也真也、生命也」を翻訳し『宗教要論』と題して出版している。全集第五巻に収録されている。

(6) 「真正なる宗教の必要」全集第六卷、三三一八頁。なお全集には「基督教新聞」とあるが、「東京毎週新報」である。

(7) 「国家と宗教」全集第二卷、三八八頁。

熊野義孝博士は小崎の神学を「政教論神学」と名づけておられる。『日本キリスト教神学思想史』(新教出版社、一九六八)。

(8) 「政教新論」の第十章、十一章は「基督教と文明」である。

(9) 「政教新論」全集第三卷、三九八頁。

(10) 「……宗教は人心最大の動作なり。宗教にては唯情のみ働くに非らず、智も働き意も亦働くなり。唯智情意共に働くのみに非らず、人心全体最大の働きを為すなり。人心の動作にして何ものか乎能く宗教の如く大なるものあらん。さらば何の

國に於ても宗教の歴史は國民の歴史にして、其の盛衰は即ち其の國民の盛衰なるを知るなり。」『宗教哲学』(一八八八)

全集第六卷、一二二頁。

(11) 「信仰の作用」(一八八三)全集第六卷、一五頁—一六頁。

(12) 傍点原島。全集第六卷、三三五頁。

(13) 「真正なる宗教の必要」全集第六卷、三三五頁—三三六頁。

(14) 同書、三三六頁。

「……儒教主義の道德たるや、本と封建主義の特別なる社會の形狀に養成せられ、唯其の特別なる社會にのみ適用すべきものなれば、素より之を以つて文明の社會に行ふを得ず、其の今日の道德に適用す可からざるや、論を待たずして明らかなり」「有効の德育」(一八八八)全集第六卷、一二五頁。

(15) 「真正なる宗教の必要」全集第六卷、三三〇頁。

(16) 小田切秀雄編『北村透谷集』(明治文学全集二九、筑摩書房)一四三頁—一四七頁。

(17) 全文を引用する。「道徳は外を謹むにあり、信仰は内を充たすにあり、内部の欠乏を補ふに外部の修飾を以てする、之を道徳と云ふ、内部の充実を以て外部に光沢を加ふ、之を信仰と云ふ、道徳は美ならざるにあらず、然れども信仰の生采あるに如かず、道徳は抑圧なり、信仰は放射なり、道徳は機械なり、信仰は生命なり、道徳は信仰の眞似まねにして其一時代用たるに過ぎず。」『聖書之研究』六一號(明治三八年三月)。

(18) 『聖書之研究』七七号(明治三九年七月)。

(19) 『聖書之研究』一八三号(大正四年十月)。

「宗教は永遠の実在者と共に内的生命を営むことである」。

「伝道は内的生命的供給である」。

(20) 『聖書之研究』一三四号(大正九年一月)。

「人には外的命の外に内的命がある、肉体の命の外に靈魂の命がある、此世の何物を以てしても與ふることの出来ない命がある、而して是れあるが故に人は特別に貴いのである、財産を奪はれ、名譽を剥がれ、縦し健康を失ひても猶ほ存る者がある、其事が内的命である、而して其れを給ふる者が宗教である、故に宗教は此世に在る者であつて此世の属でない、直に神より人の靈魂に臨む者であつて政府も學府も、然り教会も寺院も與ふる事の出来る者でない。」

- (21) 『政教新論』はこのことを明らかにするために書かれた。その序言によれば「本書立論の趣旨は我新日本を製出するに我国從來文明の基礎たる儒教主義を廃し、之に代るに基督教を以てすべしとするにあれば寧ろ此書を名けて儒・基督教論と称する方却て適當ならん歟。」全集第三卷、二九六頁。
- (22) 全集第六卷、三三七頁。
- (23) 同書、三三二八頁。小崎は基督教の構組みで基督教を考えていたことになる。
- (24) 『基督教と國家』は全集に収録されていない。明治二三年八月出版、二五年五月再版。発行所、警鷹社。付録として「真正なる宗教の必要」が収められている。引用は三二頁。
- (25) 前掲『北村透谷集』一五三頁。北村は元気に Genius の英語をあてている。五一頁。
- (26) 『宗教の道德』『六合雜誌』三五号（明治十六年六月）。
- (27) 『政教新論』全集第三卷、三五〇頁。
- (28) 同書、三四五頁—三四七頁。
- (29) 『基督教と國家』二〇頁—二三頁。なお本書の項目は次のようにある。第一、二種の国害論者、第二、基督教迫害の歴史、第三、基督教の国家及び国王に対する教旨、第四、基督教と歴史、第五、基督教と國家、第六、基督教と我國の将来。同書、一五頁。
- (30) 同書、一六頁。小崎は「教会と國家の分離は国民と基督教の分離に非ず」とのシャーフ博士の言葉を紹介している。
- (31) 同書、一六頁。内村鑑三は次のような批判をしている。「會ては二宮尊徳が政府の威力を以て日本國の大聖人として世に紹介された。一年を経ざるに報徳宗なる者が我國に起つた、……然れども
- (32) 『政教新論』は明治一七年以降『東京毎週新報』と『基督
- (33) 小崎は『日本基督教史』（遺稿、昭和の初期に執筆と推定）を書いているが、次のような時期区分をしている。  
伝道準備の時期（安政六年一八五九—明治六年一八七三）。  
教会設立の時期（明治六年一八七三—明治十六年一八八三）。  
基督教會発達の時期（明治十六年一八八三—明治三三年一八九〇）。
- 試練の時代（明治二四年一八九一—明治三三年一九〇〇）。  
基督教發展の時期（明治三四年一九〇一—明治四五年一九一二）。
- 教会漸進の時期（大正元年一九一二—大正一四年一九二五）。
- (34) 全集第二卷、四〇〇頁—四〇一頁。小崎は「三教者合同」の目的すなわち意義として第一、「我が政府の當局者が公然宗教必要との権威とを認めたこと」、第二、「基督教に対する態度を明らかにし之れを他の神仏二教と同一に取扱ふに至ったこと」、第三、「社會道德を進めその風教を維持振興する上に於て宗教と教育との關係を親密にし、互に相扶共に進まざるべきからず事を當局者が認めたこと」を挙げている。同書、四五七頁—四五八頁。

今は如何、内閣の変りしと同時に二宮尊徳は薨れた、……報

徳宗の後に起つた者が三教合同であつた、茲に日本国に於て  
孔雀と鶴と鸕鷀との羽が継合はされて新たに麗鳥が世に現は

れし乎の如き觀があつた、……然れども其運命は如何、一年

後の今日、何人が三教合同を口にする乎、三教合同は一時の

遊戯に過ぎなかつた、麗鳥と思はれしは実は怪鳥であつた、  
鶴族の一類であつた、瞬逝の如き者であつた、今日生れて今

日消えて了つた。『変らざるキリスト』『聖書之研究』一四

八号(大正元年十一月)。小崎と内村のこの違いはどこに由来

するのだろうか。

(35) 小崎は自分の出生の時期について次のように述べている。

「私が生れたのは安政三年旧四月十四日で、江戸大地震の翌  
年ペルリー提督が浦賀に来から四年後、明治維新的十二年前  
で、當時我国内は尊王攘夷論鼎の如く沸騰し、徳川幕府三百  
年の太平の夢は漸く破れ、天下は將に麻の如く乱れんとし

て、上下危懼に充ちた時代であつた。私が旧日本と新日本の  
両天地に生息し、此大変動を目撃し得たのは何よりの幸福  
で、實に千載一遇の好機に生れたと云ふてよからう。」『七  
十年の回顧』全集第三巻、四四頁。

(36) 『政教新論』第一章「今日は改革の時代」を参照。

(37) 色川大吉『明治の文化』(岩波書店、一九七〇)二二四頁  
以下。

(38) 「小崎弘道の『政教新論』について」(『キリスト教社会  
問題研究』第三十号、一九八四)。

(39) 『高倉徳太郎著作集』二(新教出版社、一九六四)八一頁

以下。

(40) 「愛國者としての小崎先生」『小崎全集月報』第一号。

(41) 「時代思想と基督教」(一九一七)全集第六卷、三九七頁。

(42) 「基督教と国民主義」(一八八九)全集第六卷、一二三六頁

以下。

(43) 同書、一四一頁一一四三頁。それ故、「教育勅語」も次の  
ように評価する。「明治二十三年十月三十日に於て教育勅語

によるものゝ発布ありて、德育の重ずべくまたこれに關する大  
体の方針を擧示せられ、是より我文部の當局者に於ても德育  
に頗る重きを置くことゝなり、德育に關する教科書の編纂を  
始とし、德育の教授に人を選び、大いにこれを奨励すること  
ゝなりたるは喜ぶべきことゝなさざるべからず。」『我国の  
宗教及道德』(一九〇三)全集第三巻、四一六頁。

[付記] 本稿は昭和五七年度日本思想史学会大会の主題発表(明  
治の思想)に加筆および註をほどこしたものである。